

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02269

研究課題名(和文) 1920-30年代の「認識論」と「経済学」による文学の「価値化」に関する研究

研究課題名(英文) Commercialization of Japanese Literature with "Epistemology" and "Economics" from 1920s to 30s

研究代表者

位田 将司 (INDEN, Masashi)

日本大学・経済学部・准教授

研究者番号：80581800

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：1920-30年代において、新カント派の価値哲学とマルクス経済学が、日本文学を商品化する際の理論的な根拠になったことを示した。これによって、日本文学の商品化の基礎には観念論的な構造が存在したことを明らかにすることができたのである。この構造の発見により、改造社の「円本」といった、文学の商品化に寄与した販売戦略の中にも見出すことができるようになった。

研究成果の概要(英文)：It is revealed that the new Kantian "axiology" and Marxism was the theoretical grounds for commercializing Japanese literature From the 1920s to 30s. In other words, this idealistic structure existed in the foundation of commercialization of Japanese literature. This structure can be found also in sales strategy that contributed to the commercialization of literature by Kaizosha.

研究分野：日本文学

キーワード：日本近代文学 新カント派 マルクス経済学 改造社 円本 リッケルト 超越論的主観性 フッサール

1. 研究開始当初の背景

(1) 1920年代から30年代にかけては、日本文学において、文学それ自体を商品化する動きが強まっていた。それは改造社が企画し、その後、文学における大きな市場を形成していく『現代日本文学全集』、いわゆる「円本」を、その代表に挙げることができるであろう。「円本」は文学作品を「1円」の定価で販売した。それは作家や作品という計量化の難しい存在を、貨幣価値へと変換したのである。この試みは出版業界に広がりを見せ、改造社の販売戦略には収まることのない、文学作品や作家の商品化を促したといえるだろう。作家性や作品の内容、そして芸術の価値というもの、計量化を避けるものであった。その芸術を商品とし、市場へ引き出す大きな流れを作ったのが改造社であり「円本」であったのだ。しかし、「円本」という作家や文学作品を「1円」に計量化する理論的な根拠はどこにあったのかが問題となる。これまで「円本」の着想の起源がどこに存在するかの「説」や「証言」は複数出されているが、確定することは出来ない。「円タク」といった、類似する商品化戦略と比較され、改造社周辺の編集者のアイデアであったことなど論じられているわけだが、現在のところ、一つの起源を実証するのは難しい。そこで、本研究では、「円本」の理論的な起源がどこにあるのかの調査をおこなうこととなった。実証的な研究はメディア論を経由する形で、多くの研究が蓄積されてきている。だが、本研究はその実証的な研究には依拠しながらも、その理論的な起源を明らかにすることを主眼に置くことにした。

(2) その理論的な根拠を調査する上で重要になったのは、新カント派の価値哲学の思想である。その価値哲学で代表的な哲学者は、ハインリヒ・リッケルトであった。リッケルトの価値哲学は文学や芸術に内在する普遍的な価値体系を認識論によって抽出し、自然科学の普遍性に対抗するための理論である。この価値体系を抽出することによって、芸術や文学の中に普遍的な法則を発見することができるようになる。この普遍的な規則は、どのような文学であれ芸術であれ、共通して内在させている。ということは、様々な形で異なって現れている文学作品や芸術作品にも共通する規則を見出せるということである。このような文学や芸術の価値を標準化・平準化する理論は、「定価」を付与するという際に非常に有用といえる。何故ならば本来は計量化が難しい文学や芸術の価値を、貨幣という一般等価物に平均化できるからだ。リッケルトの価値哲学は1910年代より30年代にかけて翻訳され日本でも紹介されている。しかも改造社はリッケルトの紹介に力を入れており、独占的な翻訳権の所得をし、雑誌『改造』においても、改造社のために執筆した論文を掲載している。このように価値哲学

の代表的な哲学者と改造社との関係を見ていく中で、文学の商品化の問題を考える背景が存在したのである。

2. 研究の目的

(1) 本研究ではリッケルトの価値哲学の影響を受け、かつ改造社の山本実彦と繋がり強い、横光利一のテキスト分析を経由しながら、1920-30年代の「文学」をめぐる「認識論」と「経済学」の理論的關係について分析する。横光の「価値哲学」の受容と並行して、プロレタリア文学者を中心とした所謂「文学の価値論争」が起こり、横光も論争に加わる。この「文学」の「価値」をめぐる「論争」は、同時代に隆盛した「価値哲学」と「(マルクス)経済学」という二つの価値理論を援用し、「文学」を支える認識論的・経済学的基盤を問い直すという重要性を有していた。そしてこの「論争」と同時期に、「文学」の「商品化=価値化」を進めた、「円本」が登場する。本研究はこのような「文学」の「商品化」や「価値化」を可能にした、「認識論」と「経済学」との理論的な連関を解明する試みである。論とリッケルトの「価値哲学」との関係を、理論的かつ実証的に分析可能となったのだ。リッケルトの「価値哲学」とは、「文学」や「芸術」に内在する普遍的な「価値体系」を認識論によって抽出し、自然科学の普遍性に対抗する理論であったが(文献3)これは横光だけの問題ではなかった。同時代的には横光も加わることになる、平林初之輔を始めとするプロレタリア文学者が「文学」の「価値」をめぐる論争をおこなうのである。この論争は、「文学」を支える「価値」を認識論的・経済学的に問うものであったが、論争の理論的基盤には、当時から既にリッケルトの影響が指摘されていた。横光だけではなく、プロレタリア文学者もまた「文学」の「価値」を確定するため、新カント派の「認識論」を積極的に援用していたのだ。そしてこの「認識論」の援用は非常に重要な変化を、理論的な側面から「文学」に与えたといえるだろう。その変化とは、「感情」や「感覚」、そして「欲望」といった人間の主観的情動を、理論的に「価値化」することが可能になったということである。「価値哲学」はカントの「認識論」を基礎としているため、人間の主観性の構造を抽出することができる。ということはつまり、「文学」に触発されて人に引き起こされる様々な情動を、単なる主観的なものとして排除するのではなく、普遍的な「価値」として認識させ、さらにはそれらを「価値化=経済化」する端緒を理論的に開くことができたということである。「文学」をめぐる作家や読者達の多様な情動の中に、普遍的な「価値」を発見すれば、「価値」を画一的に取り出し「商品化」することも容易になる。この時期大衆化する読者に、画一化した「商品」として「文学」を提示可能になった理論的な布置が、「価値哲学」という「認識論」によって

もたらされたといえるだろう。いうなれば「文学」は、「認識論」によって、人間の主観性を「価値」として「商品化」する可能性を見出すことができたのである。故に、横光が「価値哲学」を受容することで「文学の市場性」を非常に敏感に意識しながら、プロレタリア文学者達と「文学」の「価値」をめぐる論争をおこなっていたのと時を同じくして、改造社から「円本」が出版されるのは、示唆的といえる。なぜならば「円本」によって、「1冊=1円」という「文学」の「価値」の画一化及び「商品化」が現実のものとなったからだ。そして、興味深いことに「円本」を企画した改造社関係者が、京都学派の新カント派に関わる哲学者達と交流を持っていたことが判明している。このように「価値哲学」と「文学」の関係を考察することは、「円本」の成立の理論的基盤を解明する重要な手掛かりともなるのだ。

(2) また、この「価値哲学」にはプロレタリア文学の理論的な基礎となっていた、「マルクス経済学」とのつながりも指摘することができる。この理論的な連関を指摘することで、プロレタリア文学者達もまた、当時対立していた横光らと共に、「文学」をめぐる「価値」について思考していたことが判明するのである。先に述べたプロレタリア文学者の平林初之輔はリッケルトを参照しながら、「文学」の商品性、経済性について評論を残していることからそれはわかる。当時すでにマルクス『資本論』は改造社から全訳が出ていたわけだが、その『資本論』の「価値形態論」を論じた個所に、「商品」の分析が存在する。そこでマルクスは、「商品」の価値構造を「使用価値」(感覚的なもの)と「交換価値」(超感覚的なもの)の総合されたものとして考え、カントと同じく「商品」の「価値」の源泉を人間の主観性の構造と関わらせていたのである。つまり「認識論」と「経済学」は共に、人間の主観性に価値の源泉を置いたといえる。そしてそれが「文学」の「価値」の源泉でもある。この主観性という「価値」の源泉を文学の「価値」の源泉として、そして「円本」という商品の「価値」の源泉としても考察するというのが、研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 新カント派の認識論である「価値哲学」の、横光利一への影響を手掛かりとしながらも、横光個人にとどまらず、1920-30年代の日本文学への影響関係を実証的に調査した。特に「マルクス経済学」とともに「価値哲学」にも関心を寄せていた、平林初之輔を始めとするプロレタリア文学との関係は重点的に調査する。この過程で、横光とプロレタリア文学が対立した「文学の価値論争」についても調査をおこない、理論的な問題点を洗い出す。また、同時に「価値哲学」の影響を受けた左右田喜一郎の「経済学」と日本文学との

接点も考察した。左右田の経済学論文を調査し、その認識論的な「経済学」と日本文学の「価値化=商品化」の問題を分析したのである。

(2) 横光利一の「新カント派」の哲学理論の受容を手掛かりとしながら、その中でも特に、ハインリヒ・リッケルトの「価値哲学」の日本国内の文献を精査した。横光とリッケルトの「価値哲学」に焦点を当てることで、横光がどのような理論的な根拠から、「文学の市場性」に関心を持ち、文学に「価値」を見出すようになったのかを調査したのだ。具体的には、雑誌『思想』、『理想』や『哲学研究』といった、「新カント派」に影響を受けた国内の哲学研究者が多く寄稿する雑誌の精読を通して、「新カント派」の「価値哲学」が、横光を始めとした当時の日本の文学界・思想界にどのような形で受容されていたのかを考察した。近代日本文学の研究分野において、「新カント派」の影響関係というものは、個別の作家に限ればなされている部分はあるが、文学界・思想界の人的ネットワークの中で、総合的に受容史が研究されているとは言い難い。そこで、「新カント派」の哲学の影響を強く受けた、西田幾多郎、田辺元、三木清らの、いわゆる「京都学派」の哲学者のテキストを中心としながら、先に挙げた雑誌の調査をおこなう。これらの資料を収集することで、当時の「新カント派」の哲学が持ったであろう、文学界・思想界への影響力の範囲の広さとその限界を画定した。

(3) 「価値哲学」と当時の「経済学」が、いかなる理論的な連関を結んでいたかの調査をおこなった。この理論的なつながりを解明すれば、「認識論」が「経済学」の理論を媒介することで、社会の経済活動に対して影響を与えていたという事実を検証できるようになる。まず「価値哲学」と「マルクス経済学」の連関については、プロレタリア文学への「認識論」の影響を調査した。例えば平林初之輔は、プロレタリア文学の立場から、「文学の価値論争」という文学史上の論争をも引き起こしているのである。この「論争」が、いかなる理論的基盤から発生したものかの検証は、日本文学と新カント派の関係がまだ十分解明されていない現在、進んでいるとは言い難い。本研究では、「価値哲学」と「論争」の中心に位置していた平林の評論を、『新潮』や『太陽』を始めとする複数の文芸誌から掘り起し、理論的な分析を加えた。この分析過程で、「論争」に加わった平林以外のプロレタリア文学者達の「価値哲学」との理論的距離感も測定したのである。また、この「論争」には横光利一も加わっており、横光の「論争」への介入は、当然横光も受容していたリッケルトの「価値哲学」(認識論)を視野に入れなければならない。そして、「マルクス経済学」だけではなく、左右田喜一郎のよう

に「価値哲学」から新しい「経済学」を構想した経済学者の論文も調査対象に入れた。左右田が主に論文を発表した『国民経済雑誌』や『哲学研究』の論文を調査し、左右田が「価値哲学」を「経済学」に援用することで、人間の主観性を「価値化」しようと試みていた問題を扱ったのである。

4. 研究成果

(1) 本研究成果としてあげられるのは、リッケルトを始めとした新カント派の認識論が、横光利一だけではなく、広い範囲で影響を与えていたということである。そしてそれと並行した形でマルクス経済学も同じく影響を与えていた。文学や芸術を商品化する際に、画一化できないものを画一化する理論が必要となる。この理論こそ、価値哲学という認識論であり、マルクス経済学という経済学であった。しかもこの二つの理論は、価値の規則性と源泉を、人間の主観性の規則性の中に見出している。人間の主観性が文学を認識し、芸術を認識する時、そこに価値が認識されるわけだが、人間の主観性を価値化し商品化するという思想が、1910年代から20年代にかけて、日本文学の中に登場してきたわけである。この問題は論文「文学」の「価値」横光利一と「芸術的価値論争」(位田将司、『語文』(152)、pp.31-44、2015年6月)の中で詳しく論じた。横光を始め、平林初之助らが、以下に新カント派の認識論とマルクス経済学を総合しながら、文学の価値を論じ、文学の商品化に寄与していったかを示した。この論によってこれまで、平林らによって始められ多くの文学者や哲学者が巻き込まれていた「芸術的価値論争」に、理論的な意義づけをすることができたのである。これまで「芸術的価値論争」には、理論的な側面での意義付けがほとんどされてこなかった。しかし、この論争を単なるマルクス主義文学とその他の文学者の論争という見方ではなく、文学を価値化し商品化する際の理論的な主導権争いだったと見做すことができるようになった。価値哲学とマルクス経済学が、文学の価値を抽出する理論であり、それに依拠することによって、この論争は文学の市場における主導権争いとして考えるべきなのだ。

(2) 本研究で明らかになったのは価値哲学としての認識論もマルクス経済学の商品の分析である価値形態論も、人間の主観性に普遍的な価値を生み出す規則を読み取ったということである。そしてこれが文学の商品化をするための重要な規則となっていることが判明した。論文「文学」の主観性「秩序」は防衛しなければならない(位田将司、『G-W-G』(01)、pp.113-155、2017年5月)において、主観性と価値の関係、そしてそれが改造社の「円本」にまでつながっていく、理論的な問題であることを示した。この問題には横光利一や平林初之助だけではなく、土

田杏村や保田與重郎、中野重治、福本和夫らも関わっていることが判明した。主観性を価値(意味)の源泉とする思想は19世紀後半より、エトムント・フッサールの『論理学研究』で示されていた。これはリッケルトの価値哲学と重なる問題意識として、日本にも入ってきていたのである。哲学者でもある土田杏村は、この理論をいち早く摂取し、文学を始めとした、「文化」の価値の源泉を主観性の規則の中に見出していたのである。そしてこの「文化」の問題を改造社が発行した雑誌『改造』が創刊号から取り上げていたのである。『改造』では創刊号から、与謝野晶子や桑木巖翼といった、新カント派の価値哲学の影響の強い論文が掲載されていた。雑誌名である「改造」とは新しい文化の価値を改造によって生み出すという意味を含意しており、価値哲学はそのような価値の「改造」にとって有用性のある理論だったのである。また、『改造』ではリッケルトの独占翻訳権を取得し、「『改造』のために」と題されたリッケルトの論文も複数掲載されていた。その上、リッケルトの著作を始めとした、新カント派の著作を「シリーズ」として出版する企画もたっており、改造社とリッケルトを始めとした新カント派の哲学とは、深い繋がりを持っていたのである。このように、主観性の規則の中に、「文化」や文学といったものの価値を生み出す規則性を分析する、新カント派の認識論が、雑誌『改造』に強い影響を与えていたという理論的な説明は、本研究が明らかにしたものである。「円本」という画一化した文学の価値を生み出す規格の理論的な法則性は、主観性の規則の中に見出されるのである。それこそが新カント派の価値哲学の役割であり、リッケルトが改造社と深くかかわっていた理由だったのである。また、本研究では、この価値哲学とマルクス経済学の商品の理論である、価値形態論が理論的にはアナロジーの関係であることを示した。それによってマルクス経済学が、価値哲学と同じように文学の商品化に寄与していたことを示すことができたのである。従来、マルクス主義文学と資本主義化の文学は敵対関係にあるとされてきたのだが、価値哲学と価値形態論の相同性から見ると、むしろ類似性が見出されてくるのである。この類似性こそ文学の商品化を促し、むしろ二つの文学の陣営は、文学の市場の主導権争いという側面で争っていたということが判明したのである。

(3) 以上のような研究成果の外に、1910年代から20年代の問題ではなく、1960年代の文化や資本主義との問題、と本研究を関連付けることができた。論文「二人の「爆発」岡本太郎と横光利一」(位田将司、『研究紀要』(80)、pp.1-27、2016年4月)では、岡本太郎と横光利一の交流から、新カント派の理論が岡本太郎にも影響を与えていた可能性を示した。この問題からは1930年代に岡

本太郎が、フランスで横光と重なり合う哲学や思想に触れており、それが二人の中で影響し合っていたということを論じた。この論文で判明したのは、1930年代に二人が抱えた思想的問題が、岡本の大阪万国博覧会の「太陽の塔」の制作の理論的な面にも影響を与えていることを示すことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

(1) 位田将司、横光利一「家族会議」における「資本」という「災厄」、国文学研究、査読有、185号、2018年、印刷中

(2) 位田将司、「文学」の「主観性」「秩序」は防衛しなければならない、G-W-G、査読無、01号、2017年、pp.113-155

(3) 位田将司、二人の「爆発」岡本太郎と横光利一、研究紀要、査読無、80号、2016年、pp.1-27

(4) 位田将司、「文学」の「価値」横光利一と「芸術的価値論争」、語文、査読有、152号、2015年、pp.31-44

〔学会発表〕(計 1 件)

位田将司、横光利一『家族会議』における「資本」という災厄、早稲田大学国文学会、2016年12月3日、早稲田大学文学部(東京都・新宿区)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

位田 将司 (INDEN, Masashi)

日本大学・経済学部・准教授

研究者番号：80581800